

マルコ 11 : 1-26

「救い主、そして裁き主なるイエス」

11:1 さて、彼らがエルサレムの近くに来て、オリーブ山のふもとのベテパゲとベタニヤに近づいたとき、イエスはふたりの弟子を使いに出して、11:2 言われた。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない、ろばの子が、つないであるのに気がつくでしょう。それをほどいて、引いて来なさい。11:3 もし、『なぜそんなことをするのか』と言う人があったら、『主がお入用なのです。すぐに、またここに送り返されます』と言いなさい。」11:4 そこで、出かけて見ると、表通りにある家の戸口に、ろばの子が一匹つないであったので、それをほどいた。11:5 すると、そこに立っていた何人かが言った。「ろばの子をほどいたりして、どうするのですか。」11:6 弟子たちが、イエスの言われたとおりを話すと、彼らは許してくれた。11:7 そこで、ろばの子をイエスのところへ引いて行って、自分たちの上着をその上に掛けた。イエスはそれに乗られた。11:8 すると、多くの人々が、自分たちの上着を道に敷き、またほかの人々は、木の葉を枝ごと野原から切って来て、道に敷いた。11:9 そして、前に行く者も、あとに従う者も、叫んでいた。「ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。11:10 祝福あれ。いま来た、われらの父ダビデの国に。ホサナ。いと高き所に。」11:11 こうして、イエスはエルサレムに着き、宮に入られた。そして、すべてを見て回った後、時間ももうおそかったので、十二弟子といっしょにベタニヤに出て行かれた。11:12 翌日、彼らがベタニヤを出たとき、イエスは空腹を覚えられた。11:13 葉の茂ったいちじくの木が遠くに見えたので、それに何かありはしないかと見に行かれたが、そこに来ると、葉のほかは何もないのに気づかれた。いちじくのなる季節ではなかったからである。11:14 イエスは、その木に向かって言われた。「今後、いつまでも、だれもおまえの実を食べることのないように。」弟子たちはこれを聞いていた。11:15 それから、彼らはエルサレムに着いた。イエスは宮に入り、宮の中で売り買いしている人々を追い出し始め、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒し、11:16 また宮を通り抜けて器具を運ぶことをだれにもお許しにならなかった。11:17 そして、彼らに教えて言われた。「『わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる』と書いてあるではありませんか。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしたのです。」11:18 祭司长、律法学者たちは聞いて、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した。イエスを恐れたからであった。なぜなら、群衆がみなイエスの教えに驚嘆していたからである。11:19 夕方になると、イエスとその弟子たちは、いつも都から外に出た。11:20 朝早く、通りがかりに見ると、いちじくの木が根まで枯れていた。11:21 ペテロは思い出して、イエスに言った。「先生。ご覧なさい。あなたののろわれたいちじくの木が枯れました。」11:22 イエスは答えて言われた。「神を信じなさい。11:23 まことに、あなたがたに告げます。だれでも、この山に向かって、『動いて、海に入れ』と言って、心の中で疑わず、ただ、自分の言ったとおりにすると信じるなら、そのとおりになります。11:24 だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。11:25 また立って祈っているとき、だれかに対して恨み事があったら、赦してやりなさい。そうすれば、天におられるあなたがたの父も、あなたがたの罪を赦してくださいます。」

はじめに

今日からイースターシリーズ説教でマルコの福音書を学びます。

一年余り前から毎月第一日曜にマルコの福音書シリーズを学んでいましたが、うまい具合にこのイースターでシリーズの仕上げとなりそうです。

マルコは、他の福音書の著者のように多くの詳細を語りませんが、今回の私たちの学びには十分な内容が含まれています。

2週間前の個所は、イエスが弟子たちにご自身の死について語られた場面でした。

この最後の会話の中で、イエスはご自身が死なれる目的を弟子たちにはっきりと示されました。

イエスは、多くの人々の贖いの代価としてご自身のいのちをささげるのだとおっしゃいました。

イエスの死は、罪人が罪に縛られた奴隷市場から解放されるために支払われる代価です。

私たちは皆、罪の性質を生まれ持っています。

人はこれを否定しようとしません。

けれども、これを否定するならば、神の与えられた十戒を心の中でも日常生活の行いでも守ってみてください。

神が与えられた十戒は、出エジプト記 20：1-17 に記されています。

正直に白状するならば、私たちは皆、神の戒めの少なくともひとつは破ったことがあるはずで

十戒は、神から見れば私たちが罪深い者であることを見せてくれる鏡のようなものです。

人は皆有罪です。そして、私たちにふさわしい罰は、死んで永遠を地獄で過ごすことです。

けれども、救い主であり裁き主であられるイエスが、ここで私たちの罪の罰を負って死のうとなさっています。それは、私たちが死と罰から解放され、死後のいのちをきよい者として天国で生きるためです。

イースターシリーズの学びを始めるにあたり、私たちはイエスの死と復活の目的だけでなく、それが私たち自身にどんな影響を及ぼすのかを理解しなくてはなりません。その影響は、今現在から未来にわたって及びます。

これを見逃してしまうならば、イースターを祝う意味自体がわからなくなります。

マルコ 11：1-25 には、3つの事柄が記されています。

1. イエスのエルサレム入城 (1：-11 節)
2. 神殿での裁き (12-21 節)
3. 差し出された赦し (22-26 節)

1. イエスのエルサレム入城 (1-11 節)

ここには、イエスがオリーブ山のおもむきに着いたと記されています。

エルサレムに行くならば、ぜひオリーブ山からエルサレム旧市街の景色を見てください。

それはとてもすばらしい景色です。

そこからは、約 2000 年前にイエスをご覧になったのと同じような景色を見ることができます。神殿は破壊されたので、今では見ることはできませんが、神殿のあった場所を見ることができます。

イスラエル旅行の時にはこの景色の写真を撮って、皆さんにもお見せします。

このオリーブ山でイエスはまだだれも乗ったことのない、ろばの子を借りてくるようにと弟子におっしゃいました。

なぜイエスはそんなことをなさったのでしょうか。

そこには 3つの理由があります。

1. 預言が成就するために、イエスは最後にエルサレムに入るときは、ろばに乗って入らなければならない。
ゼカリヤ 9：9-13 を読みましょう。

9:9 シオンの娘よ。大いに喜び。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜り、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに。 9:10 わたしは戦車をエフライムから、軍馬をエルサレムから絶やす。戦いの弓も断たれる。この方は諸国の民に平和を告げ、その支配は海から海へ、大川から地の果てに至る。 9:11 あなたについても、あなたとの契約の血によって、わたしはあなたの捕らわれ人を、水のない穴から解き放つ。 9:12 望みを持つ捕らわれ人よ。とりでに帰れ。わたしは、きょうもまた告げ知らせる。わたしは二倍のものをあなたに返すと。 9:13 わたしはユダを曲げてわたしの弓とし、これにエフライムをつがえたのだ。シオンよ。わたしはあなたの子らを奮い立たせる。ヤワンはあなたの子らを攻めるが、わたしはあなたを勇士の剣のようにする。

ゼカリヤ書の文脈では、この預言はイスラエルが敵から自らを守ることにについて語る個所です。

つまり、これは神の民の救いに関する内容です。

王がろばに乗ってイスラエルを守るために戦おうとしたら、それは奇妙な光景です。ゼカリヤがこの個所を書き記したこと自体、注目すべきことです。というのも、普通に考えて起こりそうなこととは正反対だからです。

旧約聖書の預言者が未来について預言するとき、それはとても理解しがたい内容でしたが、成就しました。

イエスは、ゼカリヤの預言を成就するために、ろばの子に乗る必要があったわけです。このことを、イエスの再臨の預言に関する教訓としましょう。再臨も不可能に思えるかもしれませんが、いつか必ず実現します。

2. イエスがろばに乗らなければならなかったふたつめの理由は、武装した戦いのための乗り物ではなかったからです。ろばは、平和を象徴する動物と考えられていました。ろばは農耕用の家畜です。馬が戦いの象徴なら、ろばは平和の象徴です。イエスは、戦う君主ではなく、「平和の君」としてエルサレムに入られたのです。イエスは、目に見える戦いではなく、人々のたましいを勝ち取る霊の戦いに挑もうとなさっていました。
3. イエスがろばに乗ってエルサレムに入られた3つめの理由は、ご自身がユダヤ人の救い主であることを公言するだけでなく、謙虚な行動をとおしてそのことを示すためでした。ろばに乗ることは、謙虚な行動でした。

ピリピ 2 : 5-8

2:5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。2:6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、2:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、2:8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。

この状況から、すべてのことがイエスの御手の中にあったことがわかります。

イエスは、ご自身の決められた状況で、その後数日に起こるすべての事柄を掌握して、エルサレムに入られました。

これは大切なポイントです。その理由は、イースターの話から後ほどわかります。

8-10 節で、イエスがエルサレムに入ろうとされると、群衆は大喜びしました。

オリーブ山からの道は下り坂、そしてエルサレムへは多少の登り坂があります。

今では谷を埋め立ててしまっていますが、それでもオリーブ山からエルサレム旧市街まで歩くのはけっこうな距離です。

救い主なる王が来られ、その支配が始まるというのが群衆の思いでした。

人々は、イエスがユダヤの救い主だとほめたたえました。

イエスがユダヤのダビデ王の王国をもたらす人物だと認めたのです。

ユダヤの人々は、ローマ帝国の支配から解放され、救い主イエスという新たな王を迎えるのだと考えたに違いありません。

彼らの考えはある意味正しいのですが、イエスは目に見える王国ではなく、霊の御国の王です。少なくとも、この時点ではそうです。

イエスによる目に見える王国の支配は、新しい天と新しい地が来るまでおあずけです。

適用

では、マルコの福音書に記されたエルサレム入城から、私たちの日常生活に応用できる教えは何でしょう。

ここには、応用できる教えがいくつかありますが、今の私たちに関わる教えは、霊の戦いについてだと考えます。

当時の人々は、イエスが救い主なる王として来られたと考えました。そして、武力の戦いでローマ帝国による支配を終結させてくれると思っていました。

そうならないとわかると、人々はすぐにイエスを悪者扱いしました。

現代の私たちは、霊の戦いの中にいます。

私たちの戦いの武器は、目に見えるものではなく、霊の武器です。

コリント第二 10 : 3-5

10:3 私たちは肉にあって歩んではいても、肉に従って戦ってはいません。 **10:4** 私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。 **10:5** 私たちは、さまざまの思弁と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ、

最近、メンズミーティングで、「戦いの部屋」という DVD を観ました。

クリスチャンが人のたましいを勝ち取る霊の戦いを戦うよう励ますすばらしい映画です。

私たちは、霊的勝利を求めて、祈りの中で戦わなければなりません。

祈りの中で勝ち取るひとつひとつの勝利が、私たちのたましいを強め、さらなる戦いへ挑むように促してくれます。

2. 神殿での裁き (12-21 節)

この個所の文脈と教えをちゃんと理解しておきましょう。

マルコは、この個所をサンドイッチのような構造にしています。

これは、マルコの典型的な文章スタイルです。

サンドイッチの中身にあたる部分は、ここでは、神殿のきよめです。(15-19 節)

その部分が、パンの部分にあたる前後を解釈し、また、前後の部分によってこの個所が解釈されます。

前後の部分とは、ここでは、いちじくの木なのろいです。(12-14 節、20-21 節)

いちじくの木なのろいの個所を、神殿のきよめと切り離して解釈しようとする、誤った解釈をしてしまいます。

イエスは、「朝マック」が食べられなかったから腹を立てておられるのではありません。

いちじくの木のとえを用いて、ユダヤ民族の霊的な状態を示そうとしておられたのです。

旧約聖書の個所を読みましょう。

ホセア 9:10 わたしはイスラエルを、荒野のぶどうのように見、あなたがたの先祖を、いちじくの木の新なりの実のように見ていた。ところが彼らはバアル・ペオルへ行き、恥ずべきものに身をゆだね、彼らの愛している者と同じように、彼ら自身、忌むべきものとなった。

いちじくの木はイスラエルの民を象徴していました。

ホセア書の中で、神はご自身の選びの民の中に、実が実るのを探しておられました。

しかし実りがなかったので、神は彼らに裁きを宣告されました。

いちじくの木なのろいは、預言の象徴的行為として知られています。

旧約聖書を読む人々は、このような象徴的行為についてよくわかっていたはずで

それは、預言者が自らの語る預言を象徴的に示すために行う行為です。

エゼキエルやエレミヤは、よくこの手法を用いました。

また、いちじくの木についても私たちの知るべきことがあります。

私の英国の家の庭にいちじくの木がありました。

それは、教会員からプレゼントされたものです。

実際にいちじくの木が育つのをこの目で見るまで、私自身この個所を深く理解していませんでした。

早春に、いちじくの木には緑の実がなりました。

葉が出てきたのはそのあとです。

他の実のなる木とはそこが違いました。

通常、まず花が咲き、次に葉が出てきて、実がなります。りんごや他の果実のなる木もそうです。

イエスがご覧になったとき、いちじくの木には葉があるのに実はありませんでした。

そして、いちじくのなる季節ではなかったからと記されています。

いちじくの葉よりも実が先になるべきなのに、そこには実がありませんでした。

いちじくの木に葉があったということは、もうすでに実がなっていて枯れているはずだということなのです。

いちじくのなる季節ではなかったかもしれませんが、そこには一度も実がなった形跡がありませんでした。

マルコの福音書の文脈から、イエスは朝食をまだ取っておられませんでした。途上にマクドナルドもありません。それで、道端のいちじくの木から枯れかけでも実を取って空腹を満たそうと考えるおられたのかもしれませんが。

しかし、そこには葉だけしかありませんでした。

それで、イエスは「今後、いつまでも、だれもおまえの実を食べることのないように。」と言っていちじくの木をのろわれました。

マルコは、イエスがいちじくの木に向かって話しておられたのを弟子たちが聞いていたと明記しています。

イエスは、弟子たちに何かを教えようとなさっていました。

このいちじくの木は人目を欺くものでした。

実があるように見せかけて、イエスがよく見ると、そこに実はありませんでした。

当時の人々は、神に自らをささげていると見せかけて、神のみこころには程遠いことを行っていました。

神殿のきよめはあえて、いちじくの木の話の間に挟んであるわけです。それは、いちじくの木に起こったことが、神殿とイスラエルの古い宗教に起こるべきことを指し示していると教えるためです。

イエスは、「救い主」としてだけでなく「裁き主」としてもエルサレムに来られるのです。イエスは、イエスが十字架上で死なれるときになされる御業にも自らの罪にも気づくことのできなかつた宗教指導者たちを裁かれます。

適用

私たちに応用すべき教えは明らかです。イエスは宗教を嫌われます。そして、すべての宗教をいずれ裁かれます。

私たちが罪の罰から救うことのできる宗教はどこにもありません。

宗教は、神の承認を得ようとする人間の試みです。

宗教は人間が考えて作りだしたもので、人間の罪の性質に訴えるものです。

その起源は、創世記 4 章のカインとアベルの話にさかのぼります。

創世記 4 : 1-15

4:1 人は、その妻エバを知った。彼女はみごもってカインを産み、「私は、【主】によってひとりの男子を得た」と言った。 4:2 彼女は、それからまた、弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。 4:3 ある時期になって、カインは、地の作物から【主】へのささげ物を持って来たが、 4:4 アベルもまた彼の羊の初子の中から、それも最上

のものを持って来た。【主】はアベルとそのささげ物とに目を留められた。4:5 だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それで、カインはひどく怒り、顔を伏せた。4:6 そこで、【主】は、カインに仰せられた。「なぜ、あなたは憤っているのか。なぜ、顔を伏せているのか。4:7 あなたが正しく行ったのであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行っていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである。」4:8 しかし、カインは弟アベルに話しかけた。「野に行こうではないか。」そして、ふたりが野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した。4:9 【主】はカインに、「あなたの弟アベルは、どこにいるのか」と問われた。カインは答えた。「知りません。私は、自分の弟の番人なのではないでしょうか。」4:10 そこで、仰せられた。「あなたは、いったいなんということをしたのか。聞け。あなたの弟の血が、その土地からわたしに叫んでいる。4:11 今や、あなたはその土地にのろわれている。その土地は口を開いてあなたの手から、あなたの弟の血を受けた。4:12 それで、あなたがその土地を耕しても、土地はもはや、あなたのためにその力を生じない。あなたは地上をさまよい歩くさすらい人となるのだ。」4:13 カインは【主】に申し上げた。「私の咎は、大きすぎて、にないきれません。4:14 ああ、あなたはきょう私をこの土地から追い出されたので、私はあなたの御顔から隠れ、地上をさまよい歩くさすらい人とならなければなりません。それで、私に出会う者はだれでも、私を殺すでしょう。」4:15 【主】は彼に仰せられた。「それだから、だれでもカインを殺す者は、七倍の復讐を受ける。」そこで【主】は、彼に出会う者が、だれも彼を殺すことのないように、カインに一つのしるしを下さった。

神は、アベルのささげた羊を受け入れてくださいましたが、カインがささげた地の作物はお受けになりませんでした。

神のみことばである聖書は、血が流されなければ罪の赦しはないと教えます。(ヘブル 9 : 22)

旧約聖書では、傷のない雄の子羊をささげることで罪を赦されたうえでのみ、人は神に近づくことができました。

その子羊は、人の代わりに死ぬのです。

その人の罪が動物に着せられるわけです。

新約聖書は、イエスが「世の罪を取り除く神の小羊」であると教えます。(ヨハネ 1 : 29)

ですから、イエスが宗教と神殿を裁かれたのは正しいことでした。というのも、このお方が全世界の罪のためにささげられる神のいけにえとなろうとしておられたからです。

全世界の罪とは、つまり私の罪であり、あなたの罪なのです。

3. 差し出された赦し (22-26 節)

残念ながら、この個所は祈りに関する誤った解釈を教える材料として文脈を無視したかたちで引用されることがあります。

信仰が十分にあれば、驚くような奇跡を起こせると教えようとするのです。

そして、祈ってもそのとおりにならなければ、信仰が足りないか、赦されていない罪があるかどちらかだと言います。

このような教えは、クリスチャンを絶望や幻滅に追い込むだけです。

このような「偽教師」を信じた人の相談を受ける牧師にとっては、これは大きな問題の種です。

ですから、はっきり言うておきますが、この個所は祈りの性質に関する教えではありません。文脈から考えれば、これは裁きから救い出されることに他なりません。それは、イエスを信じないユダヤ人の宗教指導者や民に対してイエスが宣告された裁きからの救いです。

22 節でペテロにイエスが答えられた個所をご覧ください。

ペテロは、イエスののろったいちじくの木が枯れたと言っています。

いちじくの木がイスラエルの民の象徴だったことを思い出してください。

これに対し、イエスは、「神を信じなさい」と答えておられます。なぜでしょう。イエスは、裁きを回避する方法として「神を信じなさい」とおっしゃったのです。イエスを信じないなら、神の御国には入れません。山が海に入るといえるたとは、派手な奇跡ではなく救いを示しています。イエスはここで、私たちの力では、それがどんな考えや宗教であれ、神の御国には入れないということをおっしゃっています。一方、神を信じるなら、不可能が可能になります。そして、救われて神の御国に入ることは、イエスに祈って願い求めなければ不可能です。この教えを皆さんにお分かりいただけたことを願います。最大の奇跡は、人が神の聖霊によって新生することです。私たちがイエス・キリストを信じて祈り、救い主になっていただいたときに、その奇跡は起こりました。イエスは、ペテロにも裁きを回避するために神を信じるようにと勧めておられます。

最後に 24-26 節で、イエスによる祈りに関する教えがあります。これは、その前の部分とは区別しておく必要があります。

イエスは、ここで祈りについてふたつ重要なことをおっしゃいました。まず、私たちが持つべきと明らかに聖書が教える事柄を求めて祈るとき、いつか必ず与えられると信じなければなりません。すぐに与えられるかもしれないし、ずっと先になってからかもしれません。次に、誰に対しても赦せない気持ちを持ちながら祈ってはいけないということです。神は、私たちが人に対して恨みや赦せない気持ちを持ちつづけることを望まれません。人の行動に賛成しないこともあります。または、いやなことをされることもあるでしょう。それでも、その人の行いを神の裁きに任せ、神ご自身の方法でその状況を取り扱っていただくなくてはなりません。

ヘブル 10:30 私たちは、「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする」、また、「主がその民をさばかれる」と言われる方を知っています。

私たちのすべきことは、人との平和を求めることであって、人を裁くことではありません。もちろん、人を赦すのは簡単ではありません。けれども、その中で、私たちが赦されているのは、イエスが私たちに代わって罰を受けてくださったおかげだということを思い出す必要があります。

イエスに罪はありませんでしたが、罰を受けてくださいました。イエスはマタイ 6 : 9-13 で祈りについて教えられた直後に、人を赦す必要性について教えておられます。

実際、自分を傷つけた人のことを赦せないままなら、祈っても時間の無駄です。

適用

ここから応用できる教えは明らかです。ここで 2 分ほど静かに祈る時間を取りましょう。心の中で赦していない人がいないか思い出させてくださいと聖霊に祈りましょう。まず私が短く祈り、その後 2 分ほど時間を取って、祈りを締めくくります。

天の父よ、あなたのみことばの教えは明らかです。私たちに赦していない人がいるなら、私たちの祈りは役に立ちません。どうか、まだ赦していない人や出来事があるなら、思い出させてください。

天の父よ、赦せない気持ちや過去の出来事をはっきりと示してくださったのなら、どうか、あなたの恵みと愛によって、その人を赦すことができるように助けてください。直接か手紙を書くか、または連絡の取れない相手でしたら、赦したことをただあなたに告白できますように。あなたは私たちの心をご存知です。

アーメン。